

努力としてたかく評価されるべきであろう。また再開発、六大事業、基地返還などは、現代日本の都市行政の典型的局面の例示である。

本書の全体をつうじての感想は、さしあたって、つぎの2点である。

そのひとつは、本書は、行政機構が作成した白書として、政治的中立性をもっともよく守っており、それによって認識の客観性をもっともよく保ち、市民の生活と生活感情を、そのトータリティにおいて把握することができた。これは賞讃に価する。中央政府が刊行する白書は、私が専攻する領域とかかわりが深いものでいえば、政治的中立性がしばしば守られず、それによって、分析や結論が歪曲されたり、曖昧にされたりする場合がみかけられる。もっとも知らしむべきデータをかくし、二義的なデータを羅列する例も多い。これにたいして、本書の方法はまことにフェアである。自衛隊員の募集にたいする市役所の非協力を責める市民の声にはじまり、市の行政にたいするさまざまな不信、反感、反対運動の実態にまでよく目配りをしている。それは謙虚さと自信の双方を感じさせる。このような姿勢が定着することは、行政の進歩といってよい。

いまひとつは、本書の方法は、地域社会を住民の日常生活の場として、また、地方自治体の行政努力の場としてとらえるものである。その生活と行政の接点に、住民運動が成立する。地域社会の社会学的研究に従う研究者たちは、多くの試行錯誤をかさねながら、次第にこのような方法を探りあててきた。かれらは、それによって、一、二のすぐれた研究例を産出したが、その例は十分には多くない。そのような状況において、本書は、アカデミックな研究にたいしても示唆的である。さらに私個人としては、本書においてコミュニティ概念がまったく使われていないことに関心を惹かれる。それは、コミュニティ概念を乱用して、論議

をしばしば空想的なものにしてしまう、現在の地域社会論の主流にたいするきびしい批判として読むことができる。

〈東京女子大学教授 副田義也〉

## 残念な“行政への遠慮”

冒頭に「横浜市民が、自分たちの生活と気持ちを自分たちの言葉でつづり、自分たちの手で編集して白書をつくるとすれば、どのような内容になるだろうか」と書かれている。続けて「少しでも近づけてみたい」と心意気を述べている。この考えにまったく賛成だ。

そこで「市民がつくったら、どんなモノになっただろうか」を私なりに想像してみた。

まず〈白書〉とは、いったい何だろうか。国の〈白書〉は有名だが、これと市民生活白書とは、要求されるポイントが、かなり異なるはず。なぜなら、国は一人一人の市民にとって非常に遠い存在なのに、市は身近で領域も狭い。区民会議の発足などで、徐々にではあるが「ハダで感じ、ニオイのする存在」にも、なってきたわけだ。

そして、マスコミなどを通じて、誰でも市政の動きを、ある程度詳しく把握できる状態にある。当然、国の〈白書〉のように、現状分析だけでは、市民は十分に満足しない。とくに、市政に関心の高い〈インテリ〉がこの白書の読者対象とすれば、なおさらのことである。こう考えていくと「市政解説の部分については、少なくとも、市民が判断できる材料を盛り込む」こと、つまり、問題点をはっきり提示することが、何よりも要求されるのではなからうか。

前置きが、だいぶ長くなった。要するに、市民が白書をつくったら、きっと、市政と市民がぶつかり合ったテーマに、焦点をあてていくだろうとい

うことである。新貨物線、三ツ沢線、市道高速2号線、地下鉄3号線、金沢地先埋立など、市政と市民が対立するいろいろの問題について両者の考え、意見を並列して、その背景や問題点を〈第三者の目〉で的確にレポートする——このことに、白書の大部分を費やすだろうと推測するわけだ。3年前、私は海外派遣研修生として欧米に出張させていただいた。その時ある都市で「横浜市はうらやましい。市の考えを、自分の手で市民に知らせる広報媒体をもっているのだから」といわれた。市民が〈税金のムダ使い〉だとして、こういうモノの存在を認めてくれないとのこと。「どちらみち、役所は自分の都合のいいことしかいわないのだから」というわけだ。そして非常に発達しているコミュニティペーパーが、自治体の動きを市民に詳細に知らせている。

日本でも、市民意識がもっと高まり、市政と市民の距離が縮まってくればくるほど、欧米のような市民感覚は強まってくるにちがいない。いままでの広報のあり方から、大きく脱皮しなければならないのだ。

しかし現実には、これは非常に難しい。いわば、自分で自分の恥部をさらけ出すケースが出てくるわけであり、そのため、制約もきわめて多いからだ。そこで、今まで申しあげたようなことを十分承知している優秀なスタッフで臨みながら、この白書も結果的には「横浜市の広報活動の一環としての秀れた行政白書」にとどまっているのである。実際の自分の仕事ぶりを棚上げして、こんなコトをいうのはまったく恥しいのだが、一市民として読んだ場合、当然のこととして「行政への遠慮」が随所に見受けられるのも、残念なことだ。

〈市民局相談部広報課広報第二係長 大沢 浩〉

## 『外套』と白書

ゴーゴリの作品に『外套』というのがある。コッコツと何の変哲もなく、市役所で下積みの一職員として暮らしていた、哀れなほど、真面目で善良な主人公アカーキーの一生。決して何事もおきるはずのなかった彼の人生。しかし、ある日、食費も切りつめて新調したあの素晴らしい外套を、辻強盗に奪われてから、彼の人生は一変してしまう。彼の心は散り散りになり、乱れ、しまいには狂い死にさえてしまう。はては亡霊となり、奪われた外套を取り戻そうと、夜な夜なペテログラードの街路に出没するに至るのである。

少数の貴族に搾取されつづけてきた多くの貧しい農奴や、農奴ならずとも『外套』の主人公のように自分の労働力以外、資産を持たない小市民たち……。当時のロシアは差別と窮貧と、そして哀しみと諦観に満ちていたのかも知れない。諦めと無気力と、個々人の善良さだけが息づいていたのかも知れない。もちろんその長い寒い冬から、やがてゴースキの『月』等に見られるようなあの雪どけの春……虐げられた人々の力が結集され、湧き出る時期が訪れるのであるが……。

時代も国も速く隔たった今の今……つまりこの白書に見られる市民の暮らしと父持ちは果して当時と大差があるだろうか。

大都市のもとに派生する住宅難、経済的貧困、疎遠化した人間関係の中で、我々は煩悶し、怒り、やがて半ば諦めを余儀なくされてゆく過程を経てちょうどアカーキーが立派な外套を求めたように、せめても一点豪華主義で、わずかに安らぎを見い出してゆく小市民となり果ててゆくのではないだろうか。

この白書にはまぎれもなく、そうした人々のささやかなつぶやきや生活の一部が、断片的に反映されているのである。だが、各部共、あまり平均的